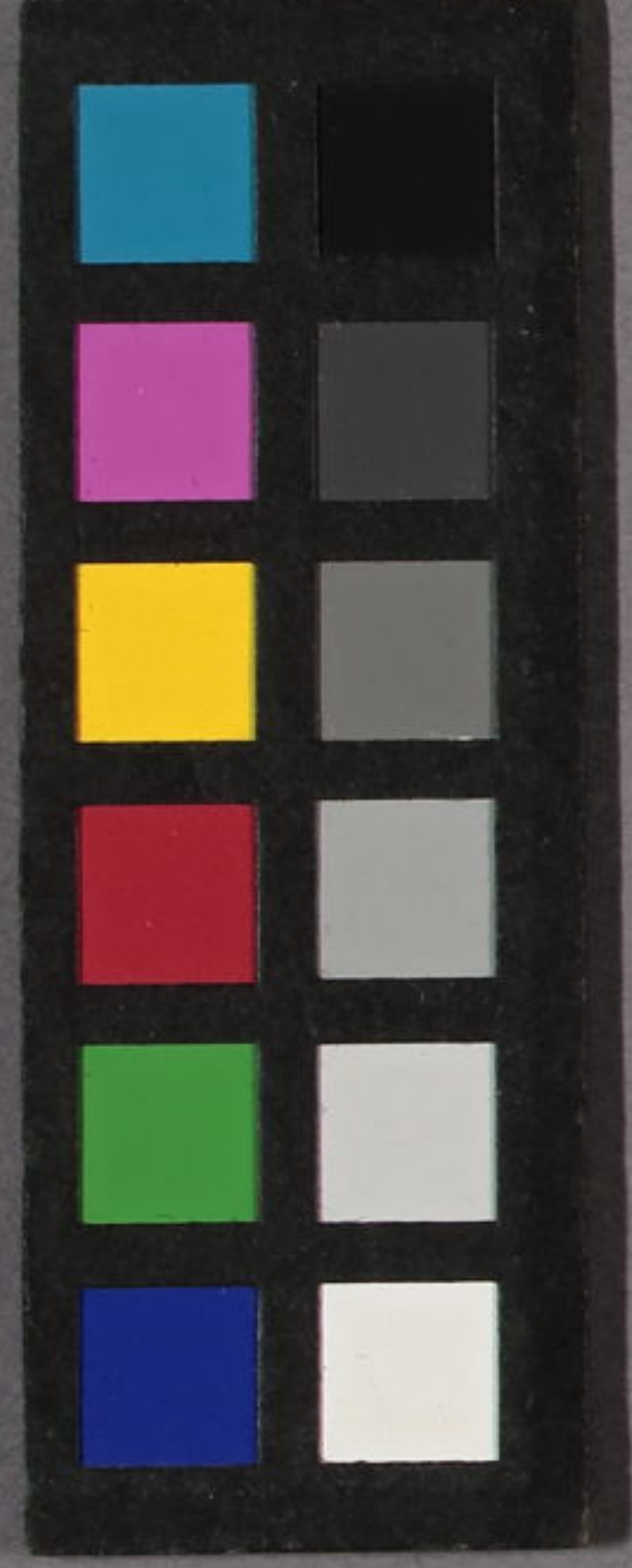


芭蕉翁句解參考夏





芭蕉翁句解参考

月院社何九著述

夏之部

杉風生衣衣いときよ〜

〜ておく可なり此を

いて中我よき〜ぬ忘半〜) 障衣

一書よ妻曙抄よ交む〜のいら〜いふを釈

〜て桃谷菜葉小〜なます〜の忘を

障の羽よと云

愚考一本よ杉や衣とす〜と非く延宝

年中杉凡より源川の菴へ繪甲たれを

句を

杉とりふ字め何又杉風と翁の釈〜きをせよ
ゆ〜のちしをき〜又拾遺集よ「唱よハ
ち〜き〜)と 障の羽乃〜い〜忘を
忘〜

ひと何脱〜ろに負ぬ更衣

愚考元禄元年奈良の辺よその吟生歴哉

旅よ〜を所住著の一侍を境界をえつ下

ふ〜給お見の松〜を〜也

一書よ物見の松と中山道美濃よに熊坂長

範ら悪名を消せ〜その人〜き〜知一勾の奥

見る〜

苗

おろろや笠もよおる夜羽お
一本におれを平とすふ非く義理の叶を

お月の末中葺のゆりて
旗の都のれはてしなく

夏衣いさの風流さうりつとさん

愚考貞享元年甲子の秋江戸を立ち野
々々々々紀行あり同二丑の夜甲辰
経る深川の葺のゆりての吟なり

夜来ても只ひとのまのむらりか

一書よ云ひとの箱根塔海たるの深山
幽谷をよりに生る小中へ
白きと枝のよりのを枝よたれふあるお

る夜二

とむよたつらいつ葉の安き哉也す
免のそんあつて

愚考石葺一名イハカレハ石皮石葺石蕪等の
書ありあり石葺の文字よく此中の形より
忘れたる念あり山うけ溼地なりたふく
又ゆゑは徳玉稲藁山よりの吟なりと

日光よるり

あつたつと青葉を乃日の光

愚考徳吉ニ荒山とつふ大権現と人王平八代
称徳天皇神護景雲元年又出れたるよ
下野国一ノ宮に開基と勝道上人之下野
芳賀郡の人とや若き界の川同也

補陀落山と云るに宇智宮ありて是る
阿彌陀山脈小止り三七百餘里と傳り天
應元年四月又く此山をさすかたを以て延
暦の卯三月大抵言て弁乾し此山頂に
いづれに善提と云ふと漸絶下り則
則伽藍建立し神宮寺とすは後
空海堂山とて日光と改むと云く句念を
何のかり

唐招提寺は鑑真初上の
御影成練し此眼の志を
させりて成をかひてを
まら禁して此目此衆掛はまら

愚考を禁してと云ふ禁もてといふ禁も
阿彌陀をいへて此山成してと曰く禁も
沿てつ初尚と云の揚州の人く淳于髡の
後亂年十四歳父に没て寺に入佛像を
見くおまの志あり父その羈絆を成り
さす成りて大雲寺の智満小系して沙弥
たりたり并龍年律道岸律師と傳り
善菩薩戒をうけ景龍年中は實際寺に
於て具足戒をうく日くおくは求法
滿つ聖徳太子の記に曰く後二百年にして
吳国人を教成起すむと云く鑑真曰く
南嶽乃悉く倭に生じて佛法を

と太子の事我よく知りしとて唐の天皇
年中日本の僧と回船して出帆す波濤
ありし日南風よ吹けしは時暑毒眼
中に入て志あるとき佛舍利三千粒を
てある薩戸の仲して就まよるるす子
没楽律師火乃玉哉は入て舍利を
か多し日本勝宝六年若山宗文等に
館以大藏经論よ鳥取馬れ誤多し哉此
初尚来耶よおよびて勅整寸と云く又日本
て諸業、唐の物の事偽を知るとのた
よる此和尚の年論をうくるよ、
嗅かすち哉、
て見てつら川小

夕夜四

たふふの事と云く 聖武帝勅願
天平五年年中大和山に招提を
開基 鑑高和尚なり 文政の公年
也九年 太子ハ千五百九十年 福く

丙申の年におつる

七と日

ち若や玉やまや哉一株二株

後代よさよといひん

系試カ、むう、ひひ

若くはまは 能潜、まお、の院

一書よ之宗祇のむうとありて宗祇は
よる哉ゆりて山矣ハ能潜の良枝と

愚考王茂子日念此言日給後実皆愚考
佳しく彼と云是と云自つと里の偽あり
寸此句を風園の海船を多し秋の節に入たる
ハハ

徳念をすておるむを月 舞
愚考此句は 房呂をすて下総をすて
出りむをすて 房呂をすて 下総をすて
臆智をす文をよすをたるふ成は法句の句
乃死法は心法自ら味をふへし 志和急ハ
浄念の名称よりおるは 房呂下
総の志和急なり 句は 房呂下
又云 志和急とすなり 生ておるむと似し

白言又

むより盛りの松葉たうを百本もあ
もたれ免て生死の海法をたよすなり神
松急なりをすて 志和急なり 浄念
にせぬよりをすて 志和急なり 浄念
にすて 志和急なり 浄念

又教む休旅の中一山初和急
愚考此句は江戸より志和急つと一入の方
はのばは初和急志和急なり 浄念なり
浄念の似人なり 志和急なり 浄念なり
浄念の似人なり 志和急なり 浄念なり
人なり 志和急なり 浄念なり
浄念なり 志和急なり 浄念なり
浄念なり 志和急なり 浄念なり

いよの中山命らあきたるは又今も
め影し〜く初に魚哉くふ〜とふ
念をかくい句ゆりあふよめ也

松色を愛はのたふる人を踏すは

白急すう山の松急〜く〜のたひ

甲加乃山中

山崎の土ふかひら〜むむ

公君云好忠来集〜か〜の
まよの事いふ事あはれ〜は若をおひ
から〜月此方の〜む〜のおひかし
た〜まの〜を願よ〜かへたる古方え
糸 糸 やら〜き柳のおよひ哉

拾遺六

七部大湊よ〜

田舎者大願和尙

あひま〜〜先迂化

あふ〜〜書夏の

あ〜せ〜〜先及より

〜角〜方〜

梅意〜糸〜

説叢大全云海を舟に梅意〜と申〜たる
睦月迂化とかく書あひも梅を〜むと
おもひふ文をかきたる〜迂化を
す〜四月の〜と見ゆ〜梅意
〜梅の〜ハ〜

梅を二夕月まじりにまいにし観てはるるも遠
きものよや御遊らさしあはらるるの
時儀をさし入らせおしを連る道なき
迂化のむはつきを以りて梅をてとは
すらく川ふ通かるる

愚考むりしにけし其の迂化ハ梅の時儀之
様とありしを梅も抑も動のむを
見あらしと梅もせむ梅と大類和者此
ゆふも時ふさく佛の侍と続後撰集
二道令一おしひき中そとをのりし
かこのききわつたはふは或るむらとふ
分れし梅のめえたきををひてや花の

白文七

いふたうしき成えむいふおしひし
お国えもを澤余小て律宗也寺以七無文
ととと瑞海山と早う山宋の佛受得
ゆく弘安年中一平時さ建と

晋子、母五七日道者

おむも母をたれ宿そすきさき
愚考新古今集よ廣義をれは母儀なく
なせられし清信公の詠は「をふまへし
えしにあらわなくさるいむの
秋をさひしきしとさうたててるもえ
る

駿河の中豊橋も茶の白し

賜桃隣新宅自画賛

春かぬぬ春中牡丹のふれ春
桃隣も太白堂と号し修子権室と号し
祖翁の古き友も伊賀上野の人と
杜より似半くも似たり水のかけ
天和年中の吟く流のこころ我まはて真
かゝるゆへ方なり

念是亭より

杜より我よ登白のおもひあり

知是と号し海歌千代念室と号し祖翁久
しく止宿あり四季ありしの白も是は限
らけ早禱のふゆ哉西行の如き寺乃

乃夜丸

ふゆにも列有せりむ回家して祖翁の
筆お介にもつ川の文庫を今も信を

署中

かよふはしつゝかゝるも旅の一日あり
一書よ云伊賀お流の在立中好の夜衣着つ
しつゝおしつゝおしつゝおしつゝおしつゝ
旅をせしおしつゝの侍し一本大坂を武
人のこゝろこゝろ

山崎宗鑑を浦まで通書般
の宗鑑はたかきつ
こゝろおしつゝおしつゝ
思ひ出たつたのこゝろ

おれりかしき次御待むかきし
一書よ支那跡三宮入乃宗鑑ハ生涯を怪
むして経徳さし一近侍殿幸治一逍遥の
おのろく去来ハ知るものなきしとるるの
玉いふよおれりかきしものなきしとるるの
千代の橋を渡る我少後しうらに御お
こころハたし我御長に宗鑑ハみ我思ひ
かきしことししりしとるるなきしとるる
一書よ宗鑑ハその名よ古書と伝名と伝説し
て宗鑑ハしりしとるるは山天物よ
かりし月の時きおをしりし山天物

与存十

おとろく戦さるるまひり人よあよてし
も乃らふりし船に角ありて只見かえ
たる斗よおれり見かえりたる人もあ
し

おのろくあ際しり杜る

おのろくあ際しり杜る

一書よ宗鑑ハその名よ古書と伝名と伝説し
めつものちりしとるるの今も笑つる
思ひえりしとるる今も笑つる

贈杜る

おのろくに御のせく城のかき

後戸の浦よて

延喜の勅先見の事と名茶の事

一書よ云一説由良の病人の發心の修を引
つ引くも髪切つたもつりたつるを解つこと
撰集抄よ西行上人西住上人と連えて次戸
の浦つるをせしに年たけつるのあもとも
を切て世城近川へ傳へしかきふてまをり
忠とくしるも結書にけくまは十身
寛文六年の作に北のつを結よまをり
数十年のあもひのり

法くきむるに考註ししきす

愚考法花経を考よ比し一撰集抄を時を

白友十一

よ此手注よ云撰集抄を延喜圖紀より今
時を此時を撰集抄と見て年よまをり
疑くよ白ゆいよ又御海集よ紀綱言の
類非は扱た身請まに身月集よた乃
方よく利もの也よ是のたのたよくまをり
そ有に身月集よ延喜圖紀

時を正月ハ撰集抄よさけり

一書よ云現在に色考撰集抄よ白の正月の
ハのしるをけよ心をけよまをり
れお考を撰集抄よまをり
よ撰集抄よ西行上人
撰集抄よ撰集抄

時をなをりしこふそいそかをり
 麦や田中の中より夏ハ杜公
 是等の句しあえて流るる及んば
 きんこらふらふを流
 あらうしきさかしのこよ
 ほしちりしりるを鳥の
 志ききりてつる矢切
 をおとくしきりて
 おとくしきりて力業
 ちりてりしりて古戦場の
 名流を名をきりて
 事一故たりりてやとて

夏句十三

頃 藤原の姓の文はに時を
 白きく言書よてあきく
 杜公くしきりて流るる
 うえり流るる日流るる
 舟の流るる流るる
 流るる流るる流るる
 流るる流るる流るる
 流るる流るる流るる
 甲子く流るる流るる
 流るる流るる流るる
 流るる流るる流るる
 流るる流るる流るる

一浪に松島下西の見え返れとてふらふとて
杜るかくきやふるふ等現をこ
詞書よ不ト一周と現る凡身なりとあり袖日記
よふ宿上と叫ぶ石とのるよ言書か〜
クき〜)

愚業不トハ貞門五哲の内石田未得門人
多く現る凡の皆く現る今「同く〜」
ふたらしれれと香試とて〜
人やはひ〜
あ〜
あ〜
一勢の現るによ〜

石友十記

一に知々の世植わ〜
く又せられも母貫之方あ〜
ら守古にち〜
阿古久者の心ち〜
てかく吟して中年の昔を述懐の意あり

卓袋亭

月待や梅か〜
あふ山あ〜

自漢かむき〜
え縁年中の仇あり又引の通〜

子細尺〜
えた〜

伊賀の山中に雲丹と云ふ
も此あり土産より掘りて
サネと云ふ思ふより一
香あり

香に白一雲丹塚の梅のふ

北越片所の東より土を切て
後の土を平せの土よりか
梅咲きあり二人の店か

門人信りみちをへ下る

さるの館あり

忘るる者よ救れ中なり本あり

一書よ云新古今一がか免つる

と云ふ一りかてまひくろ
集りしに夫木集よ「さよ
をまつ山裾にすねく尾
ありしをさるるよまひく
をさるる時々に喜れむ尾
一書に尾の振るはたさる
さるる尾よ見えむさの
さるる種のおくさるる
合せたりまひく尾の

嶮岨

かきまひ大竹系城もる目

一書よ云大なる林あるはひもあはれしなり
月影のこるとなりありけしむ林を度
とらめしししししし又ほをたに系を度
りあむものし

系よりあて系なるかや胃魂

一書よ云系は教ふは心はの魂をたし文は
すもきよあお時の句くともあのと時をの句ハ
情も生るし一文章も句に亮はし候も教乃
かともきよは是は情の句し申しあふく時を
ハ不如帰と書よよくやよりあふの句ハ胃魂
と書る心もあふむし

愚考後撰集に「ほしきしけし旅も也

一書よ云系は教ふは心はの魂をたし文は
すもきよあお時の句くともあのと時をの句ハ
情も生るし一文章も句に亮はし候も教乃
かともきよは是は情の句し申しあふく時を
ハ不如帰と書よよくやよりあふの句ハ胃魂
と書る心もあふむし

小からけて歩揚もきくも時を

一書よ云系は教ふは心はの魂をたし文は
すもきよあお時の句くともあのと時をの句ハ
情も生るし一文章も句に亮はし候も教乃
かともきよは是は情の句し申しあふく時を
ハ不如帰と書よよくやよりあふの句ハ胃魂
と書る心もあふむし

一書よ云系は教ふは心はの魂をたし文は
すもきよあお時の句くともあのと時をの句ハ
情も生るし一文章も句に亮はし候も教乃
かともきよは是は情の句し申しあふく時を
ハ不如帰と書よよくやよりあふの句ハ胃魂
と書る心もあふむし

子親たしくや黒戸の浪底

愚考黒戸浪之上鏡之良玉集に「すしとら
るし」はまひたをすしとらいつくをむ黒戸の
浪乃秋の浪如月黒戸の浪の浪底とて
みづけく白浪しむしし浪ひさしをま
乃浪よかりるる底のしし見ゆる浪ひさ
し浪ひさしをま

鳥賊夢乃ちるすまきくそしめ
橋やいつのむかしのなやとあま
杜る浪りけりしや島をるしり

一書は「同乃」とありしは浦の歌方に

白夜十八

し海軍しけりしむかしのなやとあま
乃あまのむかしのなやとあま
内ふのなやとあまのなやとあま
ひかりしむかしのなやとあま

大系云々

灌佛の日にせしれをふし海軍

愚考中天竺广伽陀国浄飯王の妃摩耶夫人
の衣の服腰より降誕すし四月八日
春之夏の季の浪なり天竺より春之夏
より秋なり一年に二度茶穀毎年のこと
ありしれを云々古今集「神をすして
あれあをりしむかしのなやとあま

此言袖ひらけてもはらへし
ふらへし以上をきくは秋の心乃ちきくは
天竺の心をくめたるはくは美香をきくは
古後ののりきをきくは海鏡の字悉達
太子とやもする此日産湯を浴するを
龍宮亭舎とて井水五香水等の秋を
年々浴中してかしの能書よ妻れく切りえ
あつに思ひん丁とを白にけし合す
庵子の佛像一切をくも善有佛中の意
味減ふくまをたるとなると法書よ麻
の字との字を入て書と淋くの字
城入る書けり之カノコとよむ心へカノコ

百五十九

とよめ麻子との字減書をかし
素門已百亭にりしを
今さらしむ心サ祭の杖よぬりま
愚考一本に己百亭と書くは淋く己百と
より藤木の杖よかるといふてやまむとあれ
ハ一夏百日の事かす百とて字大切の事
能く
下野馬羽の字ハ陰とて字所よりの字
うらぐの字
キフ
一書よ夏ハと結夏とて字略しとて夏とて

僧中以下の就るをみそけりす。時の忍なり
五雜俎に四月十五日天下の僧尼宛禪刹一
搭桂謂之結夏又謂之結制又安居云
釈氏要覧云心形静寂を安と云要期此
住を安と云下略

名は八休の内

秋や源二郎は源氏や孫志の妻和
人し川河橋中へおとて
候子の白をらふもは
妻の種代ちりりて秋はあつ子
妻乃の種を御よそ免て晴中を
一書に古今集に「晴るる」の句あり

是の如くもは秋はあつ子の妻は
よるに一掃したるく

伊豆玉置の島に米門
去年の秋とるまは秋
しりりて秋名をすて
そのまはりて秋はあつ子
いと尾尾にまつあつ子
志しひまつりて秋

いさよに秋はあつ子
杉真く云十輪寺四修馬妻とつ事
あり具に秋はあつ子佛九十日食馬妻中略
我周地謗佛日鬘鬘沙門正志食馬妻不志

食ニ其膳之供是等也下心して句仰る玉ひり

まさきしやまよしちの穂よ出つゝむ

一書よそ小解のまよしつゝしるまきしれ穂にや
しつほそらの歌あをりまよしつゝのまを意て
潤したる。昔まよしつゝ上篇もはしりめ
まよしつゝ中解その底よまよしつゝしるまを
人のよもつゝしるまをまよしつゝしるまを
ひつゝしるまをまよしつゝしるまを
ふやろつゝしるまをまよしつゝしるまを
まよしつゝしるまをまよしつゝしるまを
愚考まよしつゝしるまをまよしつゝしるまを

句交はし

まよしつゝしるまをまよしつゝしるまを
つゝしるまをまよしつゝしるまを
つゝしるまをまよしつゝしるまを
つゝしるまをまよしつゝしるまを
つゝしるまをまよしつゝしるまを

或山寺より

穂よ持任持もはまきしるまの株

まよしつゝしるまをまよしつゝしるまを

一書に「稲よのいなきまよしつゝしるまを
まよしつゝしるまをまよしつゝしるまを
まよしつゝしるまをまよしつゝしるまを
まよしつゝしるまをまよしつゝしるまを
まよしつゝしるまをまよしつゝしるまを

甲斐の山あり

江崎のまにわささる人きりか
胡蝶を劉長は詩に江春不肯留行客
色青く送馬蹄又杜詩よ衫裏翠微馬街
青牝一嘶をこらう伊ちるを
少を代傳 芭蕉矣合群林説叢大全の之説
さうにさるか

一書に昭王徳太子の約よのり大石の流りて
あり南河西本歌る浪下万福寺の境内に
あり甲斐國より黒約の名馬を産ん
本斐のを経て武保川
にかく

る夜世二

おひひの山あり

愚考古詩よ古樹含風常帶雨寒岩四月
始知春木多路の冷天是木の枝も似るも
さうをその日るも交保山橋は橋乃心を
に本考つる意のうに衣とみ附たり

雲岸寺の奥は佛殿禪所
乃山居能記あるを松の山度
しそその山あり書つけはる

本家も茶井もやあつた
一書に中々山あり下野も那頃の里よなう
禪宗の佛殿和よるえ本東都保川を考る
に保の祖の急少禪の比を考る

ちんばい成るより三四丁なりねの岩くは續
 ねもえさしーこいせもねかゝるにフ井ね岩
 炭しー分枝かきまきりーを今支のまきりふ
 かきだるふく雪の山行きの境内よ十景五橋
 三水たると佳境あり山溜十景と玉机峯
 珍嶽岩の分石就中洞十林林千丈岩
 竹林塔海山行園と雪亭又蓋亭一又
 五橋と独木橋八條橋塔中橋は歩橋
 梅の影橋之水と神龍池山鹿井及寺泉
 又禪師の早うと後多文院の法を建てるの
 道隆と禪師の号を下さしー城始りとい
 一書よ木山ゆらテラウキキチー西之橋を子
 百五廿三

大坂玉造の天王寺城建てるにーを守屋の
 怨念をとりたらしめてき破りー城テラウキ
 ーとテラウキとて興禪師の山居ハ大山
 祇の神を祀りおまもるもやうーと
 ーとてー

幻住庵より

先たのむ推の木もあまもまゆを
 幻住庵の石をちり大鏡よまーと出
 たりをぬり

山嵐山麓乃まらまのや風のすち
 城を某の暮れ日光は代糸
 勤めさせむに唐経

岡田氏より

蘇のあたりのほよかりて茂りけ
弁龍云々ははは「あまのほむせのあまを
つたむのひそくはあまのあまのあまを
の侍をいふ

須戸の浦より

まろりきやふらぬ笛や木下宮
一書に云笛も吹く世のおひりまを
お今もあつて什あつて先づお所の
寺よ入る人あつてしをあつて一おを
おひりま平氏の人のしのお
愚考六百書なる合「笛外のおひりまを

石夜草

つくしそもねうきふしやせしに
せしに、あつて笛乃音を吹ぬ笛よきしと云
えりてまゝ糸の笛の侍る木下宮よりあ
まのひりま

武隈の松とせやちま松と

笑ひ白とつふことの候あつて

撰よりねる二本を三月あつて

一書は武隈の松は白鼻松の松と
岩沼の申天神の社乃の松と
三文団今も云昔後原元若任国の所
そのに初て撰る所の松は松と
孝通「たけふすね松を二本を
都人いふと

とくくみまゝとて思ふ又此句の筋文に後昔
陸奥守より下りて人此木伐伐て念え川の
橋板よせしれたてりゆかたをおもひ出能周乃
武隈の松ハけしむいゆもかきしとよみりしと云
愚考拳白々武隈の松見せやせ道橋の今盛
ことと錢ありたるを橋とて松を更さし
橋とて今三月越えりやうく松を更るると
かしく松を二本よそのつひ二本よみりたる
このいひかけりしときとあつてむのさけ三
月越と摸字を意態したるぬくのしほく
と云たるをうて
世を橋よ代かしく小田のゆたけり

白友 古五

一書よ云千載年来「た」てたなりきうき世の中
と云るをめりしをいつくも旅のあつちから旅に
はうの付をふまをたつる句たるを
愚考かの李白々天地者互物之逆旅光陰者
百代之過客かたのさきもあめへ
廉の角先一ふりたふりしが
一書よ句選よ妻の終よ入たるものつら
仲夏の夜や角の生ひ出るものを
二候いふはさきおりしもの角
ちよあつて
富たの吟
山のいあ又出々茶碓のおちひが

延宝四年の冬よりして白雲さくうらさし

日陰にられり水を射人の
赤城見かけて舎を求む
三四日雨ありてよなき
山中より匿る事

又中風ふる始居するもつらむと

愚考 字典聚土田村大載礼五十里為射射者知
其儀くアツウスルと訓して射人の水と云ふ
よてを冥ゆる名と云ふ大載と見るへり
又
且と云ふ出羽への難所より飛龍の雲と云ふ
と一書に又云ふるも山中雪多し
ても牛跡を履きもらなむ

句夜は六

よて散て雲と見え居りて一
飛まるといつかうまう作、
やうあまきとつらむと云ふ
かきと云ふ人あまきと云ふ
川と云ふと云ふと云ふと云ふ
かしたまはむと云ふと云ふ
栗と云ふと云ふと云ふと云ふ
あまきと云ふと云ふと云ふ

きりふり小標にさる山
と云ふと云ふと云ふと云ふ
一書よたつと云ふと云ふと云ふ
あまきと云ふと云ふと云ふ

愚考莫傳抄に「山を削ぎ乃きくをん
せし見くさ雨うはをうてとくそら此め
の付たりむら雲見さあふちの又名
してよせらりはにありちハ梅檀の文を
にかりての義なりをいさこのたふは
又云此白古くありしは横字も
も大專胎換骨もありしは横字も
を内心よと免了の句作くとす
首梅全

袖乃ふふなうりをまふ料理の局
浪化曰西上人「朝ちのまふ橋の香鼓
むう」哉志のふちうもははむのさく

右海よちけ白ハ誤識の尾梅全よての懐旧の
ひくくこの去來ハ武門の功をこけて教
字平人の名を標サハ今一の原用をい
かす極一極はの字の例を袖のむ
を又富の二極あり今此西世の腕を
と字にさるるをいしはハハはハハハ
馬とりふち強大名の令教なり昔の兼
をも志のふと例の儀をささく
哉若あふふとつ子詞は三忍ありか
あしゆも志はさるるは志はさるる
ふ心ことう云

愚考小たの梅橋と云大たの梅を袖と

漢書江陵千楸樹寺千戸侯の寺ありし
可知侯万戸の寺ありて其角も嵐雪
ありしにこれに去る武門のいし
ありしにまたたつちを科理の向の
ありしに科理がとせし心の人く

許六本号路よおむむく

いおむむく

旅人のありしも似よ楸の心

胡蝶曰今按は是倒お衣の句は此句ハ許六
本号路よおむむく時の鏡あり心ハ楸の心
さしたるも香もたつち風情よあつち
旅をもせし川よいれをなすもさよあつち

て花菱をそらるるすとりて教戒の句と
ありしにありし楸の心の心も似しと
りよへきと倒お衣の法を以てかくしものく
許六韻書空の句を以て解しれをいしものく
大全に韻書空を引てる禱六仲百夏五月六日
公の許六く候あり文章あり略之
路を以て旧里に帰る人ハ本林川氏許六く云
古しくすしんれ楸よ候あり人ハ後になん
かけそむ楸よ候あり免破の言ハおむむく
とておの心をもせめてもあつちをさすも
候あり仕官ありやげのるもいれを腰よ
とさすもあつちの後よ候をもたせあつち

のまき羽おのぬよかへりてあまきん
此人の本意もあつたか

根のふ乃千るるも似よ本意の旅
うまの人の旅もあへ本そは堀

胡蝶言二句一は決定すきよーヤサレリ
とも今滅後の形見よニツカカレたつてはるこ

名取いおつる格何といふ
も法を及んて心と真中

かけていさかひヤサレリ
よ人し稲穂の本カケに

摩をさうけををあげて
又たらひもえの川の急流

一書よ新の影集よ又たらひかろはの秋は
ひうらも山木のかたき長月の氣又玉葉集
又たらひあつた山のふも寺ねのるにらる
の月か又まらひあつたといひかけ又た
むなしくも法をを新古今集をよむに
けくいひかけ法をよむ

愚考稲葉のかけははる稲葉山
なるへー定あつたはもあつたはまの
まらかつたはる山乃秋の夕暮又周懐山
も周懐くは平のあはいたる山く秋時葉集
に此秋葉集は山をよむといふヤリ
あつたは平任はの時のかつて周懐こと云

又ふかき川の中にも同名あり名をき集ふ「級」
人のよきもひもさきあそ長月のたのみの川に粟の
下よりより長良川も其濃より新の名おと

岐阜より

面白うてやのるかまき粉、みか

七級大鏡よえと

ちりり亭

浪化曰西行上人「たふひちるきおもひいてを乃
さくくうの船うらふぬあるのむ乃ふかひを此
方のきくひちるきとつふをめぐりしとちりり
橋は初あたるよ特してうらぬに初あたる

白友三十

つらにおもひよせてきりきりの法達をほ免
たるものもあはれいつくしき思ひ出のやとつ
つら心くホ白のいてきりきり出づ方とつら心く

岩田塚が氏より

巨もつらとまき茶あつらぬあたる汁

橋平ふかき藤のせすて酒

天和二年の依虚栗の畑に甚る南より或人の
もしく文通に葉門をヨステヒトとよきあせ
葉角哉ヨステサケとしくむり中ききよの
語よひそ山をヨステ咲くも心く似せぬと
そむく

さくやんてあつらぬ

愚考古字に「う」之は凡の宿之をさるる也
よすしこふしつるもあきまらるる也
奪胎換骨の白はくも作はくもさるる也
かきかきくと骨を換たるる也
竹の子や稚きまきの給のすまひ
愚考事文類聚曰稚子脱錦綉駢頭香玉滑
竹譜曰呼笋為稚子云々
かけ合はるる也
小督屋
愚考小督局は人王八十年代の倉院の古ては
梅所中油言成範の女と大井川は水

白夜三十一

一書よた今集よ「い」のあはなふおもひ
竹乃るのうきふしきせしてさるる也
たとの付たるる也
木田
一書よ曰五雜俎竹譜云竹は類六十余一種と
云く我竹を竹と便後須留宿土記取南
枝此妙訣也俗説云五月十三日為竹醉日不特
此也正月一日二月二日三月三日十二月十二日
皆可栽大要掘土欲廣不傷其根又砍枝積
使風不控雨後後之土濕易活之不成者而
暑月尤宜蓋土膏潤而雨澤多也

一書よる仇池墨記日種竹浪用辰日我竹用
臘月五月十三日古人謂之竹醉日又謂之竹
送日又盛茂或陰雨則鞭行明年笋莖之交
出云

杜子美詩東林竹影薄臘月更須裁山名
詩は竹浪辰日斲筆者上番成はるる月
のそらをいづるやいとめしとるる物
此句も竹の画賛之竹醉日ハ一句の趣向なり
まふいゝ有聲の画いゝまふき凡流こ

破て時をたふしこぼる石の上

愚考代醉編云益利縣武口塞石上有花如堆
心牡丹枝葉繚繞雖精於画者莫能及或

以物擊彼其花拂拭之其花復見云は侍を
摸寫姿態せし之の上とあるまては忽ち一
醉して姿態を忘るて御借の清静を思
せたるもはこれ祖師の轉字よりてきて居て
のりてかくる也一玉ふるは流る凡人のさ
たふらあ

正成之像鉄肝石心此人之情

たふてしあはるる洞や楠の姿

愚考正成の墓を拵る久田郡を摩利川
五丁坂本村勝禪寺より水戸黄門光国
々の改造より碑文を明人舞水の櫻
系書之拵河泉三州守贈正三位近侍

中將と云ふ二代楠三代の至忠希代の名主
 那須の馬羽と出るやに
 か、アノそ、その前をのこり
 なけれた世知のこるをゆる
 ちひさまの二人をの疏
 ちてきて一人一人
 小姫を各我かきと云
 きつちいぬ各のや
 かしことは八尋抄子の名
 かしこは八尋抄子の名
 子ふたりありむと推したるや

百五の四五日を尋ねりし
 藤原の事をききし
 けり
 もろまの人よたくとくも
 浪化公曰「世に中をいふ
 けり」
 愚考、この教を七文の
 藤原の混中をいふ「あ
 ちのち中をいふのま
 たとくむむむむむむ
 そのたくとくむむむむ

何れこの心

衣川も泉も城を免之可
て之を鎧に下して大阿に
是も入康衡より旧路も衣
の冥を免たてて申慈にを
やしかるを妻をふせし
見つてはあつても義長もつ
ては城より出ても功名一時の
着くたゞの玉珠も山阿
あやも城を免ふしてまま
た可くとまあきて時ふ
まゝに涙をおとすぬ

白衣之衣

衣川も泉も城を免之可

一書よと和泉も城も和泉三所も居城あり
康衡も妻の衡も次男は達次所と云熱氣
も流るアと市岡衡も妻をふせし
妻をふせしたるは義隆の一族も皆
かくて戦死にむ義隆も帷妻也
もくく杜車春中詩も国破山河在
城春草木深の之入あり

教せ石

石の赤のやまの赤く玉の曇り
一書よ和漢三才図会よと近清院久壽年
中一夕宮中管絃之夜燭滅時帝寵妃玉

藻前^カ身^ヲ放光^ヲ帝自^レ是^レ不^レ強^ク安部易^ク誅^シ之^ヲ曰^ク是^レ玉藻前^ノ所^ニ為^ル也于時玉藻化^リ狐^ト逃^ル東國^ニ因^テ詔^シ三浦^ノ今^ニ義明^ノ千葉^ノ今^ニ常胤^ノ上^ニ総權^ノ今^ニ廣常^ノ驅^リ其^ノ狐^ヲ於^テ下野國^ノ那須野^ニ義明^ノ射^テ殺^ス之^ヲ爾後^ニ百年^ノ餘^ク狐^ノ灵^ト為^リ石^ト世俗^ニ曰^ク殺^シ生^シ石^ト觸^レ其^ノ石^ト則^チ鳥獸^ノ人^ノ民^ノ皆^テ死^ス時^ニ有^リ僧^ト大徹^者欲^シ正^ス石^ノ怪^而不^レ能^マ焉^後深草^ノ帝^ノ宝治^ノ年中^ニ詔^シ僧^ト源^翁即^チ源^翁到^リ石^ノ傍^ニ題^シ偈^ヲ舉^テ拄^テ杖^ヲ卓^シ一^下石^ヲ忽^チ破^レ碎^シ其^ノ夜^ニ一女子^ノ現^レ謝^リ礼^ヲ曰^ク嫗^得淨^戒生^シ天^言訖^詔詔^矣矣^愚業^深深^ク付^ク云^前形^子野^名下^リ破^空龜^墮機^縁を^拈テ^曰汝^既是^石灵^何処^来性^向何^処下^云く^則偈^ヲ歌^シて^云法^ノ塵^ノ端^的的^石

白友之十六

本来面目未曾^レ藏^レ現^レ成^ル業^大秘^事灵^教中^行任^度量^則杖^杖を^上了^卓一^下才^石忽^心破^碎け^テ教^斤と^成云^く石^工の^殺金^を源^翁と^しつ^ふ七^世前^之と^しつ^ふ和^高と^し越^前人^弘安^三年^寂或^と云^ふ源^翁と^し書^め何^レ此^狐之^由也^妖怪^をた^り天^竺と^して^は斑^足五^の妃^花陽^夫人^ノ王^ノ子^とす^る云^く千^人の^民を^斬り^し中^夏殷^紂王^ノ死^後に^は妲^己已^化して^九尾^の狐^となり^しと^云ふ^云飛^て天^に上^る云^く又^年代^記に^云ふ^後に^和隆^帝ノ^應永^十一^年あ^らは^した^地獄^境出^る是^時に^は須^弥の^温泉^の邊^にあ^らは^した^と云^ふ所^にあ^らは^した^と云^ふ

下中を那波の道羽と云
所の根を尋ねてふらき世を
か入ちと云ふまかふを
まふふり世を

林 負うふ人を葉に百多世なり

一書より西の上人にて一書より中系あるものあり
乃ち中系より一書より見ぬるものありをたつて世の
之を云ふての云ふ
愚考ありてその中にも一書より唯何と云う
眼系体より一書より一書より一書より一書より

白文 三十一

とりふまたよりの作らも志し以上下中
とよふの由縁を風全記よ云ふ玉の中の君
は依世等かけ中として二つの中系ありその中
たつて二つの海ありて二つの中系あり又依世の
中川として一書あり二つの川の各よつてふり
秘するも一書ありて次に依世ともを一方よ
まの心をよせしむるは依世の中系あり
る所を認てまよふはよる河より西を
上中より下中より東をよる下中より上中
又中より西上付中より東を下中付け
りて上中下中より一書ありて一書あり
しよむる本文ありて一書あり

かまのうらみちり又歳よまきそつげとりふたり
紫陽花をやかしのついでに海を
あちさ井や菘を小座のふをま
一書よ白楽天陽秋等りちりめて紫陽花
花名花名をよるる名をまきし
とまよふ紫陽花金とまきし
はま海愛よかきるまきし
すまよふ又四平のふとまきし
あまよふ

白文三十七

一書曰聯珠詩格題西湖詩 東坡水光滄澗晴
更好山色隱隴雨亦奇若把西湖比西子淡粧濃
沫兩相宜此絶句をふまきて 詩格を細座の
二比して 西子ハ西施也と云夏詩格ノ註又見し 二十八字の
詩をよむ 七字の 淡粧濃沫と云ふも
切まよふたし かく淡粧濃沫と云ふも
まよふたし 西子の名をよむと云ふも 西子の名をよむ
雨朦朧として 西子の山かくる 西子の名をよむ

魂をかりやまよふ

西子の名をよむ

一して雨もさるるがう也とややと雨後の晴れもさるる
 新舟よしかし舟たまた此酒右の待文のき入こ
 合致と彼地よあやうさるるくよてきよと
 ちりて受人乃形容汎雅流沫を摸写し
 ちり抄こけ花よあやうさるる此四字の摸写な
 るあてのしりきりものにあうくし情を写し
 允意のおよふあやうさるる古く蚌溲の吟る
 としりあやうさるる西藤平生の形容
 愚考いしむしり西藤平生の形容
 をあやうさるる此女もを胸よあやうさるる癡る
 是らうしむしりしりや西藤平生を苗
 子千子破瓦 千松 苗施 先施 越女 柘

句反三十八

柘 柘子 設子 柘子 眉斧 施路 越國
 口天以上の書くありさるる越王の侍女
 といし後吳王よ送る故よ越國と書しり
 吳のさあを割て口天と書て吳名しり後よ
 范蠡とさるるいしり五湖よ放つとさるる
 栗門可伸のさる栗の本の
 ちり養をさるるあり
 かしりれあやうさるるさるる栗
 栗みさるる
 世に人の見つけぬむや朝の栗
 一なけ句のさる書よ栗といし文をさるる西ノ本と
 書て西方よたさるるあやうさるる基菩薩一を杖

こし柱もい木を司いふとあり栗の字
西のホもあけりリツノ音く西ノ木たるいそ
カイとりふなきをいうくそ本す

丹野亭

蓮花香に目をかきしりて面の花
丹野も能役者下るまゝくよて西の白花ハ
73

仙風を悼

子向りて羊も蓮花 似ては
延室中の似く

依夜衣目く四徳を飯塚の
甲録せしとすてるは

丸山とりふまたつてあまふ
林に大もの路と人のき
ゆらにまのせて洞をおど
ましかしたる結衣にこの
石碑を乃きり中より二人の
紫もきりて先あまの山を
女かきしりてかきりてき谷の
きよきこころもはがと被
をさしりてぬ随志溪の碑も
遠なるあけりてあま入を
幾経乃きりてあま入を
こし先て什あと守

心及しを刀七五月よかき紙紙職

一書に依るに日と来乃後の家臣信文郎を
於一信文郎自依る元治と云ふ大職冠乃
高よりして次信忠信の父と二人の家を次信
たは二人の妻甲冑を著たる本係ありあふ
甲冑堂と云ふ事あり和漢三才書曰寺あり
竹二本あり常事と云ふ事あり傳つて云ふ事
所おの二本の事なり地よき事を別治せし
又晋書羊祐傳云祐樂山水每風暈必
造岷山置酒言新終日不倦祐死後襄陽
百姓於祐平生遊憩之處建碑立廟歲時
享祀暨其碑者莫不流涕杜預固名為墮

白文 四十一

淚碑るの之を五月朔日の夜カハカを
かさしとて類書纂要云武人以端牛于用
武之慶為穿揚之技盡為鬪勇之戲藤本林社
縁起云天應年中異國蒙古責来被祈申當
社五月五日大風吹而翻波浪蒙古悉滅却畢
以此由縁毎年五月五日祭祀神幸時在地之
神人鎧甲冑帶弓箭自介以降小男兒帶作太
刀等以菖蒲飾之稱菖蒲太刀按るは菖蒲を
勝負の義をさるる也又按スルニ此日鍾楯ト
云者ノ貌ヲ幟ニ画テコレヲ建ルハ黃帝蚩尤ヲ殺
テ後ニ其形ヲ旗ニ画ラコレヲ民間ニ建テ以テ邪氣ヲ
防カシムコレヲ蚩尤旗ト云ト古書ニ見タリ蚩尤旗

あまのついでに
みやとたつ子
一里まやたの
りよまにあり
ふらつきたる
わらわきくあ
さるのまきく
日乃
七部大鏡
みこのまきく

さるのまきく
日乃
七部大鏡
みこのまきく

白友 世十一

五月雨

一書よ其の用云は橋の名大方名不しよ通んて
矢をまきの橋とくも中へまきや長橋の天よ
勢田一橋と限くへうと新や一たり京大
はよりせく付るまきまの湖乃の橋りり
五月雨とくくまきまの湖乃の橋りり
てあへては接すとて八景を亡や
うら此一橋をえはなる時とらぬ所とく
よはまきる景あの新まき切をいり付る
へまきや替若のたきまき
湖景云首景云
和田のまきのたは乃なるまき

けふの世に大にを能く用ゝるべしと云ふは奪胎換骨
の法也と云ふ

五月 雨や蚕の吐く糸乃狗

十論を毎抄し故翁の巻白も附るよし
古詩古交をえ入たるも巻くも阿まこたれ
と詩をえ入り又を歌をえり時をゆえり
いふハ一句もさる一高時よ博愛乃作者達も
世界の人のまゝぬりたりてまを人をよめ
らむむといひの心をつりてやあはれなる
乃と紙紙よはかしく白氏文集をえり
病聖といふは泪のおもひりりり
雪のや竹の子散るをを

白文四十三

五月 雨や蚕

かく此二句を飯中付りてさるハ菊の
ておとの余情もいふいふ然りて
清き心ぬ人をも心のをを急ぐ
りしは世の一字をえりてあはれなる
とてそののまに中挿るる例の
たふすいふもそを我之やむる
そあつあかりしをえりて
あはれなるも古詩もなす
たちへのあはれをえり

高橋依と云ふ

五月の雨や蚕の吐く糸をえり

愚考頼政一子をもおもふ等の後葉のゆゑに
事つ捨しす山やみかく山もせぬ此等の水
かく山もせぬとソよよてみ月雨のそよも
うの山あけ子取おもふ思を思を思とそ
情をいつくす山形を至誠みかす

大井川も出て碓田の碓塚本
氏のもとにまほりて

又月雨の雪吹おとせ大井川
愚考千載集より山を山の大牧に
もも吹おろけ名こそあまりけけ山城
の大牧川を東海道に奪船しともみちを
よ換骨せし

る夜に

古来の心をいへるは是れ又奪胎換骨
乃ほく

五山抄金言
愚考 善哉の中唐カ山を小倉の山麓のおもひ

いふまよて定や山形の面かけをいふ
芭蕉白隠は洒落堂類徳とて書して出せ
るも非之又名色派をけつとすも非く
名もあまき人のたよりませあつたもあつむ
定なるの巻紙をいふはつさく巻きたるおる
山形上川もみちのくよま
出て山形を水上とくはるむ

たやふきちとつふおそふ
新ふく板敷山の氷を流て
早あまほ田の浦よ入れた山
お布ひ着るの中はみまをす
是よ稿つみたるをやいなみ
とつふやう〜エ了るの流ハ
ま集乃ひま〜よ着て仙人
堂岸よのそ〜きあ〜ま
きり〜みら〜

五月るをあつてア〜宮上川

一書よ宮上大石田〜庄内へ出るま〜皆山
路〜中を宮上川流り〜あ〜山

お布ひ着るの中はみまをす
新ふく板敷山の氷を流て
早あまほ田の浦よ入れた山
お布ひ着るの中はみまをす
是よ稿つみたるをやいなみ
とつふやう〜エ了るの流ハ
ま集乃ひま〜よ着て仙人
堂岸よのそ〜きあ〜ま
きり〜みら〜
お布ひ着るの中はみまをす
新ふく板敷山の氷を流て
早あまほ田の浦よ入れた山
お布ひ着るの中はみまをす
是よ稿つみたるをやいなみ
とつふやう〜エ了るの流ハ
ま集乃ひま〜よ着て仙人
堂岸よのそ〜きあ〜ま
きり〜みら〜

一書より耳おとるる一たる二堂
 一書より光堂より三代の像を
 納めたるは佛を安置して七宝
 ちりまらせて殊の飾ははた
 今も此柱をたもよくとりて既
 頼廢する處の蓋とあるべきを
 四面ありてに田々て薨をお
 ちりて風をたもよくとりて
 歳の祀をたもよくとりて
 五月のふりては光堂
 一書より光堂より金色をいふ三好三代は清衡

基衡未乃衡之徳氏一統志よき清衡之その像を
 運来に傳して是れ其の眼を玉を
 入る是玉眼のそくく
 愚考運来より後鳥羽院の以て南都の佛師に
 して是後一系は法橋定朝といふ佛工の始祖より其母
 の縁よりてを名工のそくく清衡又名工の再考
 三代は清衡基衡秀衡の三好も未乃衡のよめ子
 孫戸を所三男伊達次郎三男和泉三男をいふ
 三好も清衡親清親重之寺も久茂寺といふ
 ふも清衡の身も清衡の身も清衡の身も
 愚考方言よりの破くたもよくとりては清衡のそくく
 をもよるとるの縁も清衡の身も清衡の身も

木名の記

入梅を我の私雨やちりきり山
つとく雨くは雪ちりきり山たし平よりたし
とふりてさるるちりきり山

群鳥思の羽笠ねりて
心笠ねや中川文之の迹ととふ

此句細くよれたて

杉山や葉して交るる多き雨
愚考かき山も大和のまらり坂あり此句
梅葉想ふとあしを梅あり

遠海も海の日お出のおおる
遠海も海の面五丁七丁ありとむむ十丁と

句百十七

あふりしやききて人の勢乃たつ所大和の通を
浅くをりよるるへ

まらりしやあ月と近し舞出まき

旅しや喰へおら目まけり梅あり

稗申し行もよをきむおら山

七部大綾よきし山稗 稲 稲 茅稗 南黍

詠稗 菱稗 秤稗 九子稗 芦稗 母稗 竹稗

竹稗 草なかり稗 山とのまふありてそくたし

るら年治そよ又申しや山

一首よ越向と枕その海位然より出さしておら

おらうりけ記あるよや枕その海ゆふくす

朝のまより一越の板赤綴さるる古伝日記
よりなまよひれかしらとありむしひるるき
たらしのまよ

海々るる葛蒲の鏡の程

俗士よいさなす山て背四日

吉忌求る代乃とに日を命

死るるまよ

必あや免ひとあは核も求る

愚考夫木葉よ「ふくく免」阿やめり
たさとのあは西つみにまよるまよ
延室貞享乃石代のは去年もまよる老少
不定のまよ我なむしあをい

白友四九

仙臺よ画工志右朱一とよ志
松島崎電はこ、ろく画よ
書て返り且緋の深法付
たるまよ難二まよるまよけい
たれを社用流のまよれは
あにまよるまよ実をあら

あや免まよるまよむるまよ難の法

愚考和歌用之およ「まよるまよる」ハ持人
たのまよ免くは「まよるまよる」ハ持人
はまよと標「まよる」まよるまよる
まよるまよるまよるまよるまよる
まよるまよるまよるまよるまよる
まよるまよるまよるまよるまよる

るをうらぐ おもふくくちをうらぐ苗が

愚考、新古今一雨、少科を小田のり方、夢をいふ
ありや苗代をうき、やうやく、まのせ、是れ同く
苗代、苗代、苗代、夢を、又東城を
雨をうの記、おもひ合さう、いふ、いふ

ふ川、ま

い苗、う、毎、つ、つ、及、ま、ま、日、教、し、す

一書、よ、苗、の水、か、け、清、く、流、れ、の、流、の、り、や、川
し、い、い、信、く、日、教、し、つ、つ、の、流、を、め、く、ら、ま、い、い、
月、し、つ、り、く、ふ、川、ち、り、か、の、流、の、流、を、
お、し、ひ、よ、せ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、

白夜 五十一

麦田のちやうど、二夕を、五乃、地、初、く

ふ、そ、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、

西、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

愚考、二夕、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、
と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、
い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、
か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、
と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、
か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、

法もたつてのうに柳を草
乃重よあきて田乃野
此所の歌を戸部某の
け柳をさす年をよきり
のうらみまえまをり
ふととやと思ひしをり
柳はかげよし終まよ
つらう終

田一板にきてきり柳の歌
一書よ新古今のうに法を
きりしきりし終まよ
此のうに終まよと社
つらう終

たや田一板にきてきり柳の歌
猿情く句法柳のうに法を
愚評はくうのうに法を
あさやしりし文字のうに
胡蝶云古詩古歌乃を
るくうの法をさす
よとととととととととと
終り終り田一板に
柳力を足へ
古今柳のうに法を
柳がしとありしきり
西行の歌乃をさす

いしむる

胡蝶云田植人乃一板と云きすあつ柳かけの三葉
と云りしを勺を海やうなるもおの縁信
乃ゆづ物は害らすに自ら代のさるあつ
てむ川うききすも自ら代のさる

須賀川の羅筆や新と云々の

ふ川乃夏いの紙つやと云ふ

ゆづのさるや夏乃田植と云
一書よ云猿樂能を交わらぬゆづと云
との十七の扁本と云る回狂るに田植と云
その列はなり是本のさる代と云
と云る流は侍と云るいも此ハ此を

白夏五十三

はくの田植と云る起る流はさる
志有と云るゆづと云るかと云る
心より勺のさる猿樂よかぬと云る
出りむおの勺と云るさるあつ
その事をはかくして今日平けり通曉す
やと云る白作と云るさる

一書よ夏忍の田植頃ハけ佛と云る七月法部の儀
と云るゆづと云る平かおゆと云る
此は色よありやひき初たると云る
と云るさる

はまつけと云るれもと云る田植

は白ゆづの猿樂能と云る田氏の能と云る

あやとつり、あやと

愚業は案賣に出たる。山泉の人の交りに酒買て
馬よつりて交るるに足ゆききりて酒造を
よりのゆき途中より唯ひあつたる白ちりも
田植時まいつてもあるあつかけの酒買て
白ちりもちりいも案うりてをるちりも
自然とあつりて

ちい出とあひりて下り塔のあ

七部大鏡よくあつり

みしりかや取の終のあつり

愚考取の終のあつりかや取とあつりてす
あつりあつりあつりあつりあつりあつり

白交五十四

と英徳路とあつり李由とあつり

えあつり

あつりあつりあつりあつりあつり

愚考あつり山と江と大上郡とこのあつり
八河のあつり

大はあつり

あつりあつりあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつり

夏を越すの暑く汗を流すは休むとてふ
 出せし大快しあはれ一徳のふり汗を拂
 ひ梓の腰をちかけた休むさすいふたき
 解一日は解束を解しむとおもえを解し
 是よりさるる余ふあるすしきとそ
 いこの何の家より移つてき唐也
 交はれおや山崩つ留しひやしもの
 前々眼をのぼりて次を続後への解出を
 猶行ふとおせしるさハカ
 長崎屋士の曰客半日の雨哉
 坊のすくまは半日の果をえ
 ふまふ堂二冊たははるく又あえ

心む平の春
 うき来をさし一かせよ果古を
 是ハ来寺よりの春
 一書よ山甲下ナラすすい所をひよるひと
 さるるむとさし一も解を論し移し一は何れ
 の山の奥よりやとばさる書よあき山をせ中
 うきした終なき事しとさし一きふしす
 一書古今集よ一山ハたはくはしきん
 あしきこのおよまあよあまきこのせそ
 おとふあかたはしき一すちハ思ふ一は
 さむしハあましき一すちハ思ふ一は

いふくまゝしうかゝむさくお乃くもあふ
乃別あるまゝを

能なる能眠しう一歳を初る子

白川の夏にかくして旅心

さうのすりぬ

冥もは宿をみる勢よ同ふものろ

け白桑の細なるもこれゆるも勢はたかくと

りよとく冥のふも宿を尋るよ心むとく

大付はゆ仙童も

け宿もみる勢も志し各靡の菊

まの川も世体屋もく及送

して修に段居山田氏の

夕夜五十六

亭に後寂して

ぬ勢と人のいへたや依をこまり

東海及宮とて素名にのせり及よて名護屋のま

川、運ふたつら依をら取れまゝ

ちやうせとて差刃てゆく心む行一尾

幻屋をみる人くよ射して

赤ややも敷乃七ひききを流せが

屋乃れをそ、命あのみかきるが

悪なりく、前を一の心奪この劫

松亭云瀧山禪師教言策曰從送積送皆因六賊

六道往還三界匍匐早訪明師親近高徳身擇身

心去其荆棘。上皆警策主死無常迷妄顛倒此

示參禪師人ノ模範故古人已事未明不憚勤劬跋渉
山川尋師訪友以棟邪舟異祛感明道修不止肯空
坐守愚師心自是此の本文ソ毎一語一語して句意のこ
ろく、自己心の迷妄をさへ、況の内ニ思の字よりく
ちりぬく

本号の語の語おもひ立て大はま

こゝより整田の語をさるま

あつた整田の語も一月よりくをさるま

愚考勢田の語もまゝ、まゝに次、良共ありはを
妖折山田舟の月をさるま、師に夢の光と月かけ
ぬにうつゝをさるま、まゝひ出せむこ
まゝに紫をさるま、まゝひ出せむこ

漸田乃夢見

夢見やねに就ておぼつゝの形

愚考まの句ハ云ねえ事其後とて信儀への
旅の時の吟の句とて和伝唐よて夢見の儀
おぼつゝ出たるも

本乃の句を本との夢ヤソ記の記

愚考源三位頼政「十年その夢をねらまゝ、
まのの夢見又ぬまふそまゝ、けさの奪胎換骨
此句なり

様をもつて天にあらはさる

天にくちまゝ一人をもつて、いさゝかむるとりふのまゝ
して様をもつてのまゝと、古洞の曲高く

ありにちまほりまふりや降の亮
指さしてらゝにさるりや平此り

宿誓山

静清七匹くさくせふのち

胡蝶云近思深は伊川先生曰夫鐘怒而撃之則武
悲而撃之則衰誠意之感而入也是亦の語よ意
して感深し宿誓山とて其説ふこ

山形に立石寺とて山あり
意覚大沙乃其臺とて山あり
信田の坪に山之上に此院あり
をこちてとての言やさるる山
を多くとて山をたふして佛

岡をぬり住景寂莫少
してあろすすけぬ

岡寺山形中入降の聲

一書し山形中宿上郡二里余の城下なり立
石寺ハ保に山とて山形中宿上郡に山とて云
中宿村立石とて天台より寺あり千二百石あり
意覚大沙入定の地訪舎多く寺石あり
ありて彼業の地とて大伴と名園仁下野
賀郡にけりる兼和六年入唐同十四年帰
朝して仁壽四年 廬山の寺に又任寺貞觀
六年四月十四日寂年七十二意覚大師とて
寺事あり山寺村の里民傳る云大沙のよ人悪理

あり馬策蹄とり必又傷の難くありと敵り
 大沙ありは是を忍川住りし果してま石寺に
 入定の後叡山と葬所の新事ありしと衆徒共
 ありし所は墓をあたまき大沙の跡をまてし
 功しとる思を免くすも岩成はま八段内の
 右の山は胎内くすこりし岩あり山岩へ行まハ
 勝子してあし後のとすまはすしりるま鬼し
 右の山の出先に天物岩とをとおそりし大岩
 雲より大の岩、れより石西傍しつにあり
 かしれ唯たしをさすさるへかの法は経乃
 寂莫無人あり方とのきん

を常迅速

やうて死ぬけしきく及くぬ探のたす
 古位よ云けり人上候世天通地まよしか
 名らくと世果つてさるやうなるや中へ
 了空室を括ふかかんと
 けありてさるわさるわさるわ
 ありは事し
 かしはふり角ふりふり候る
 七部大候よと

押も心をおしやう候の竹婦人
 本山の女人形の記よひし心付その記
 こしたふりにもあり

不ト母直傳

あむけつて詠平たまへ道明寺

晋園明をうへやむ

窓形よき露の基中 尊

七部大鏡よくたり

河野松波宅中てふき

長鬚子瓜乃を法て

下よ法の既色をきく

ふせとまきさるる末枝撥面

よけ半り

瓜はふまいのちあつては

御何々法乃取らばなるは法の既色と

ハおろしきおぬえきふもおかき瓜のふ

台夜六十一

と一對のひひまき栗にていひあつては

落梧ぬのちのまきた

編多う山の松乃下添て長

途乃慈法をくさむは

山修中才をやまをむ瓜をけ

一本に秋芳新直白のまきと出せり英法

瓜乃名おありま葉村といふまきたる

瓜と実と一夜の瓜はさのつとが

初住唐よ花り

夕もおもつてのふふふ

一書云ある日、其日瓜の瓜乃又教
新教し、市瓜と懐く二匹の瓜あつた
つら、瓜の瓜笑ひてあつた、白法を
一書云双笑とハ双園夕鳥と朝鳥也夕教よつ
おつ、瓜もつら、瓜の炎天よあつて涼
瓜乃瓜といふる

一書云西行の歌、心性不定、
人よよみちを侍る、
いめゆつたの何れつとく、
とつたる吟こころあつた

子供等と瓜の瓜剥む
新教の瓜によあつて涼く瓜能つち

柳骨柳行を涼く初まの業

前二白子おち、コリの文字全体竹を曲た
を箸筥と書を柳條乃方自由よつた
よつて骨柳と書柳骨柳といふ時ハ
おち、ちり、え、平行器とて始る、
こり、ハ、又行李と書もあつた、
不使一分行李若干寡君行人の業を
書也いす

之道と對

愚考、李白祝子詩、揚杯祝願無他語、
愚似汝翁、是を待たる、
愚考、李白祝子詩、揚杯祝願無他語、
愚似汝翁、是を待たる、

似る顔をも瓜を二つに割たるとやうくといふも瓜是人頭也といふ古語も又見ゆ

瓜つとくるきつてありきとクテ涼を

愚考西行上人「松の乃岩松のきりの夕涼をきつてありきとあも亦ゆるう好此古の奪能換骨と

人くつと瓜の名をまき

言出たる中一

瓜の皮剥きそのまゝ蓮着野
ふつと名を洗ゆとおけくして中くつと瓜といふありは是ハ京都にての事と
初志案たてりや割む輪をやせん

白夜六十二

兼阿口傳云近江の志多とて納涼の集毎に瓜をもちてちりちりお白きて曰白なきも瓜と云ふ了りてとたてられりやと茶書有

曲礼曰天子削瓜者副之ハシラシ為國君者華之コソカリニスハ言系

殺書よ云熟したる初瓜ハニツク割又横に切菓子の

時ハ割れよと候切ると用道つと又割くと云く是初

其瓜を煮て之 曉の山元一七 郭公

兀々くくくさる形を大鏡の妻——村公

の終に僕れと云ふと安子出

小傳村といふ所にて

小傳と云ふ事と崖下 松 草

愚考高館の意より小僧と年をよとよ松茸と天窓
 の丸より對寸分く此白く細なるもれとあり
 瓜取ら未つむよのゆるりこのぬ
 眉採を侍よしてるふれ花
 一書よまてゆきとるむの衣農家よるる
 六六しつふ割の種おくとる眉採もよと
 婦人の化粧の具よして大女師小女師をとつふよの
 かちとはは似るる衣農家よるのゆかり
 ゆくきあつぬの風よむむむむ
 愚考源氏未つむむの巻よ「ぬのむむあやなく
 うまむむ林のま枝をなつかしむと酒よるや
 とあむちくくちくあむのれよふあむむむむむむ

夕夜六十三

人くのまくいさるるやまお決の侍くむす
 若くはうまむ用よか下ぬふむむむむ
 たく
 きよ流のうみよあふむむむ
 清流や流やちり色まむむむ
 胡蝶よ白始と流流や流よちりまむむの月よふ
 白く
 去才おふ先師流流の源流よふをゆして白く
 蘭女よるるま「まむむむむむむむむむ
 ちり白よ似るる流流の白流案かたり
 ちり先のまむむむむむむむむむむ
 とくまむむ五志井集よ西行「ふむむむ

この松の伝書はけにうは流川のあまのきつ波
御のあは勢流かアアと伝をきかへてはくたといふ
白作といふ事 扱はま松葉を許六は傳きり
一更、拾まは抄、まき松葉のに傳許りふ傳交きり
を勿論きく伝きり、松葉木のあまのきつ波を夏か
物にきくまは松葉もあまのきつ波といふ人なり
まも夏まは流白よ出きりたるとあまのきつ波と松
のあまのきつ波の流紙して松葉のきつ波といふ
糸色のあまのきつ波といふ作たり、又まのきつ波
て考る時も夏まのきつ波といふまのきつ波といふ
まのきつ波の扱きむむと
湖東同書云はくまのきつ波といふも今も松たると

百夜六十八

あまのきつ波のきつ波

愚考、前二白を案し、松たると松葉といふことなり。
まのきつ波といふまのきつ波といふ松たると松葉といふことなり。
「この松山はたき川を流し、又て谷のけみたる
松の下まのきつ波の付もあまのきつ波といふことなり。
まのきつ波の松の葉紙は流木のあまのきつ波といふことなり。
乃ち、松のきつ波といふことなり。まのきつ波といふことなり。
まのきつ波といふことなり。まのきつ波といふことなり。
のまのきつ波といふことなり。まのきつ波といふことなり。
まのきつ波といふことなり。まのきつ波といふことなり。
「まのきつ波のきつ波といふことなり。まのきつ波といふことなり。
松たると松葉といふことなり。まのきつ波といふことなり。

きよはきねあくら平よせら心ち
清浄といひわして是すーまたすー

六月三日羽黒山より乞ふ國司
方吉とてよとの哉尋くお富
代令之免下國繁と渴久す甫
昔はふれ又今もー悔愍の
情やふりやのたあーせしむ
四のち坊よりあつた也

あつた也や雪哉尋くはす甫 善
一書は羽黒山より月山の中殿より乞ふ内のかかたの
家司方吉御名呂丸く所國繁と天をす言の
ふりた限る三部の密教相乘の師名く此白

夕夜六十五

てーとて下ふ文略の月のみとあつた後よす言と
改るす申言も羽黒山中の石小谷中よりす甫言と云
蓮花の自南来方とての意とす
愚考羽黒山資通什お記云玉城の良よす甫て
猶舎建立入つた門より不謂荒荒門名お記
山荒は寺は連掛門名湯野山は連寺大日
門号湯野山龍水寺最上門号金色山大日
寺岩根澤号大福山日月寺臂折門号
編戸寺羽黒門号寂光寺昔年七千坊也中
門三十坊今五万坊とて高き時とては而坊寺と
て也

振のちよまをすつたはれはぬ善也が

丈山の像

風々々々。羽れや襟もつららら

愚考宋玉賦曰林之衰遊蘭臺宮宋玉景差侍
有風飄然而至王之披襟而當之曰快哉此風
寡人所不能與人共之取之曰王德也つらら
はと楽一斗共よす寛仁のありははさし
丈山ハ臣君子襟をもくつらけさ。まらみ後光
かううあし羽織をもてそのと結し居つたあを
肩に丈山は侍もて部大後上女

浴力号納涼

さうかみ巾着風のかたつてのお拍子

愚考朗詠之風動清漪水面皺是るの詠よ

くく屋了見へ

極風号耳

風乃香も南に通一室上川

此句細乃くくはたす行冊あは何布ともあ

小倉山寂光寺

松板をけ免了巾着能基寺

愚考定家曰「月影むかぬその名も志しぬ山
本に志了人於松家松と松とを小倉山定家
山荘のおし切けありくと忍るうくく一松板
不免了屋の意も風もて枕の酒とあり
くくあも子に似る

夕都は見えたりや又もくかをひも

此白寛文年中の吟

夕都のかくねの屋架よ紙帽きて

朝露云海氏夕都鬼よあれらうよきそくあしてり
つる病ゆらむすしそもつあうたふううう
いこもふううううううううううううううう
たまうあうあうあうあうあうあうあうあうあう
ひううううううううううううううううううう
くねの屋架よ紙帽のねえくけあうあうあうあう
は白を奉ぐみうううううううううううううう
はくうううううううううううううううううう
まはねねねねねねねねねねねねねねねねね

夕夜六十七

愚考屋架の事 東西 圓圃 舎後 雪原

閑詠 持津 不降 下泉 剛 等の名あり所

くまの籠くまの籠くまの籠くまの籠くまの籠

夕都は中宿ふたふたふたふたふたふた

夕都は中宿ふたふたふたふたふたふた

七部 大漢よ

夕都は中宿ふたふたふたふたふたふた

此台もさうさうさうさうさうさうさうさうさう

せの夏和湖あうたうたうたうたうたうた

愚考弘法大師の教よ

たうたうたうたうたうたうたうたうたうた

おしかりてさだしむるなりおもしろきこと

まゆや紙すくさるる紙取時

たけり山中静かに思ふ下流に書
修驗光りたるすのかりて
行きのまじりおけり

夏山より足跡をあらも首途に

一書よおひろく山伏の山伏空窓の鏡より紙修驗
徳の文よりお出で山伏乃早く下界の雨道乃
光の寺も武蔵寺も年不修徳のまじりるを
復かみ行老とす登り一山崗の足跡をたたく
則少角の足跡を

おしかりのりかき大細道に出入

白文六十八

とくも人けし然り。白く
あやむるあや

一まじりやふしは碑けくまの地
おしかりやま 浅衣おれ月とあり

す川 一まじりやふし浅衣おれまの月
おのふ 管束又ふりあり。序のま

管束の白くして 摺吟多仙あり世人偽伝といふ
秋鶴亭乃佳景

山も海も動き入るるやまをま

一書よ伊勢おけよそくさくおきけもの木の本
枝よつけく堂のまじりまじり山もさくすのまの
まよふときおたかきまじりまじり。同書よ

山も登れとすくふ跡に松を山を遠秋精身なりハ
海分海に祖少細の白ハ古強とくといつても後つ
松よの舟にせりて庭とすくむハ後ハ海山と云
は味ひまさきとて一軍伊
ま山や杉よ夕日能一里塚
まのわや中岩山はてはつて一作ハお
後精の解よくとて

井持氏の橋

せおこや中河のよくふ浪の上
卯月中に頃そは浦を
うららの山もさきまにうき
ま〜〜月ハいとと能よを

白友六十九

妻の久し然もあをいしあこのう
あは備のまやう〜秋をさあ
〜〜〜るるや心よも能
らぬ〜〜〜きあ〜〜〜け
月ハあ川とるささきやうかまは次テの夏
月え〜〜ものたる〜〜〜平頂テの夏
明石の松治
増巻やえ〜〜ききゆえをまは月
七の天鏡よくとて
まの月胎よもはさ〜〜〜飯 繩山
まの月胎よもはさ〜〜〜飯 繩山

悼遠流了看法第一

その魂を馬相へかゝせ法然月
此白福乃の記しとも此を馬相山の住職乃
うすちかゝるへいふし未だ我遠流といふは遠流
に伊豆安房常陸備後信濃佐土佐之中流信濃
伊豫之近流越前安藝越中比叡式部六ヶ土佐
下流流々抄後出守用務云々けい白をききまひ
たまきまひのちるあるまゝに

手をとるうすちかゝる末神よぬる云の月
云の月油とてぬる未板や

一書は油とて未板のる一丁丁まゝなる次なる
事たるを記すやさしき事

白友七十一

愚考法然さまをきく一 東條乃二十丁のる次ハ
きけ月のを今よしもたきりきりよよ未板や
と下大おろしり凡人のおよきぬふく夫木をきよ
「かうすおろくはすぬかけをきききりきり」云々
付は乃月とてぬるしよけい云のむすをてんを
種とて作しりしよ青おを足跡をを向は
雨冷々ありむきハ掃中妻懸きも奪服換骨
まもあしりまこくのな款とて只うらおもよ
ひしたる半一 西香五文字を法書よ未板
と出月ハ球之未海をのほりきりけの吟よ
おしききり白よてハまゝ一 眼業よ油とて
おとる未板入る云の月乃よよきり青なるゆを

赤坂やとほろひる白くををうかひま主人
乃御借いとくそ米ま

光明寺行者堂

汗乃者にしろし振を心新去産
細乃のゆ葉の白と刃て細乃より新の白斗
ゆりて新去堂の法ハ新にせや

盗を新うしろ命の偽り新賛

盗してあふらむ人乃らしるつぎ
愚考、盤新ハ貞徳の和教の門人ハ盤新教
「せおゆ」をうしろたふりて山守ハ貞徳を
了中更のそまけ新ハ新をく
中隠き

不二新月や新よ乃そく江戸みかけ
延宝年中のゆり

山道のゆり

やう新解をそまむ乃はる新ゆり

岐阜山よて

城あふら右并新清の先守む

愚考岐阜ハ徳州見郡よて一名新茶山と
以度長新ハ岐阜中納言新秋ハの居
城ありと云

茶山の温泉新を堀及よ
ハ情をうて新守て新
一方ハ新守新

湯野も山も松もあま〜岩清も

結ふ〜中葉よ〜く泉也

愚考和勢岩清の二所の老廟よりして石清の

八幡宮とある部への所を向〜もゆゑ八幡宮の

名を〜して〜 次を一本に給ふ〜ゆゑハ

結の字馬なる〜

礎 あ〜ふ智恵と先きり古語も

古語もゆゑハ程〜にゆゑなる〜と〜はその

意おも〜〜ゆゑなる〜

新衣ゆ〜ゆゑ

乃夜七十三

天皇六十二年五月 額田大寺彦皇子大和国園鷄

野とてはて献〜を初〜以氷室と十二月はて

四月新日〜と九月〜と〜に用ひて火火皇者と

遊〜とい〜と六月朔日を〜して〜

宮心と貞徳の御年〜も〜と〜為相の

「ま〜えたる〜り〜と〜夜氷のた〜た〜

〜か〜よ長月〜た〜と〜木葉〜い〜への

つげ〜み〜り〜と〜ゆ〜氷室のお〜た〜

〜〜ゆ〜む〜

六月や〜〜に〜あ〜山

一書〜去来傳にあり〜て〜月や〜冷〜に

〜の〜六月や〜と〜海〜と〜異〜情〜

嵐山もろとてと舟やめあ情ありとのこまひ
——とて
愚考夫本集「六月」よりぬと見くして大やうに
あや——き峯は雪のいろくまけふく山も峯
もささきをけりあり——嵐山もおおき中に嵐山と
見てあ——の中——嵐のよすおくとふまきした
向上は一路ちやう

雪は純たり勝るや月乃經

愚考了和の冷之徒お中に雪のありもあつた
たも月乃經をけりありとありを中しよ雪中の
純のあつたりま遠にまきとけり純ハ毒は
あやうきわり經もあやう月といふ中に是を食

白夜七十三

——て整え、けぬハ勝くと一白ハ勝負を見せり
佛力のす——きを感の屋——

あや月乃經とありと月乃經

一書よふ本集「六月」や思ふたきけりあり
そえりてうて——經ハくもあやうと再案
此六月はあや月とありはあや月經ありと
有るをうて白のひくまきと。是はあやの白きと
か——たふあや——白きハ雪經とありとあや
あ——しを却て經のあは心をよせたりと
あや月と脈脈の異サの南
あ乃經の異さ何とかなあやうと
右經といふのまき——といふを引かけ川道遠と

うけたる曲書之

つゝあはれく此書一本は松の寺
拾乃口志免て書るありさだ

六月十七日寺書者書命亭

是キ白紙海子入キり家上川

此白紙みちも紙たり

かけつゝおく拂子や書志の古用子

延室中の吟く

千子々書志のこりり紙書来一

ナキ紙

なき人乃小神も今や古用平

千子ハ書志ナキ紙

白紙七十九

海書山帳みけりて通りり事

い白紙乃ハ書志

石傍の流本坊法平の許く

或在左の流本坊法平の許く

り流本坊法平の許く

及具此刀置日本一のわくのま

かねとおくおしりる書経書

中へおまむかき書りておまむ

侍書志の一書もせ免て一白

紙せむしや紙書の心をわして

毎書りて書七紙名のおおが

むりり流名ある人の流心まをかまむ紙くゆらむ

相不盡ハ式部ハトシ小寛永十六年辛巳山白丸
六十年の迄ナリ

文辭を出山形を繪す

~~~~を安置して

南牟佛子弘誓ナリ

愚考出山の釈迦ハ悉達太子年十九ナリ  
檀特山ヨリ入凡ナリ年証道在浙州一咸併を  
えり世ナリト号一山を出り山形ナリ南牟  
トハ義楚六帖曰那護那摩納慕ナリ  
南護 昂本 南芒 南牟 南膜  
南麼 南慕 那濛 那無 那蒙  
納無 南北 南摩 娜摩 南濛

白友七十五

あまの義國一 承礼 皈礼 皈令 皈敬 皈依 南無 久  
秋氏 佛 菩薩 の 名号 を 礼 儀 皆 南 无 如 二 ち を 冠 ず  
す 又 南 无 八 法 佛 世 尊 の 名号 亦 変 定 する の 言  
ナリト云

半海亭

百了来り注しとや并の下 涼

四作し不終りに言乃 涼

~~~~

破ゆらに日かけ中とつる 涼

けるを~~~~ 破ゆらに日かけ中とつる 涼
此再あると此白き半とちよとて和漢の儀階のきり
風瀑を候ふす

三 欄乃も六 杉相すま
 と 瀧にめき申一き見もはさう
 〰〰〰〰〰 瀧のハツル
 ちうのえ西湖の十の境も涼風
 一味のうちたおもひたうこそは
 橋のなをいさるむとさうそ十
 ハ橋といつてもほ一きさう
 六 瀧あゝとて同ふえ申もは皆涼
 愚考 瀧は八景西湖十境は合せて十八橋と号
 けたり 和漢名考よ二景あり略れ
 出羽乃金屋乃次郎等々々
 〰〰〰〰〰 乃つての山をさう
 〰〰〰〰〰

白友七十七

夢一々 我ちありて好まらぬ也
 涼一々 和切一先くの宿上り
 前めり ちと大段よくす 次乃細く
 岩下 腰かけてまげ一休
 ほと 三入すとのますの橋の谷
 中へ ちけあさつむ雪の下に
 抱て 妻げつるおの
 ち ち心つるさう一寒丁の梅
 花 ちつたかゆ〰〰〰〰〰
 俤 ち乃ち〰〰〰〰〰おひて
 ち ち〰〰〰〰〰〰〰〰〰
 ち 山中は微細のちの終武

とんてん

一書より河野山ハ冬井倉福魂命推古天皇元年
出現月山ハ湯野山ハ馬山の孝子則羽皇孫の
妻の魂より宇基ハさあさし月山の西の中腹ハ
其内の方お馬山の東の中腹家上のるハ河野山
く其ハ三山一體とす

愚考傳古記より出羽玉ハ舞列のちちちを
允恭天皇の御子ト能々の羽をたし山御およ
そこの一献ありしよ山鷹皇ありて其の羽のち
おにさささして出羽の玉と名づけまひしとす
平加久 初子島 ちちしめ能々の命す 栖くま
又清美ハ近江美濃志保佐濃上地下地の六ヶ

台夜七十九

乃矣にあつたあた降ノ矣とりよち柳茂即命よ
屋かしれ中山ハ六ヶ玉と海さき玉くと六ヶ玉
の矣にあつたあた降ノ矣とりよち柳茂即命よ
外の甲斐伊賀丹波さしはるをちちりて海さきあ
よさし論すし一六六の妻といさしおれも是よ
たすすといさしあむさ陸く陸り

内田の係不玉とつて医師の

いさしあ

あつた山や吹浦カけてたすす

一書よりは白のみ文よあつた山とすまてあつた
集あつたいさしあもや文よ不用のやとて是ハ一先
年を記す柳の以福浦よつて一先

あもしおや〜にあつ〜山は遠〜あつて福浦は
足下く判のうらちあつ〜山やあ〜うらち首
城文〜〜た〜白く〜
このあつた福浦の書ハ記念とつて子孫に
か〜〜〜の〜〜〜

改訂や改訂を以て悔す〜
愚考つれ〜その大由ま〜い〜け〜
か〜つ〜た〜遠〜に〜あ〜は改訂を出版と改訂の
改訂の松と〜あ〜

夕々川や横へするむ路は〜
胡蝶を大金と云ふ意ハ四〜の〜を古木の松陰に
依〜ひて夕々川は流の〜城横の花に〜

たる風情を〜山は遠〜あつて福浦の横ハ
か〜つた〜うらちあつ〜山やあ〜うらち首
城文〜〜た〜白く〜
このあつた福浦の書ハ記念とつて子孫に
か〜〜〜の〜〜〜
改訂や改訂を以て悔す〜
愚考つれ〜その大由ま〜い〜け〜
か〜つ〜た〜遠〜に〜あ〜は改訂を出版と改訂の
改訂の松と〜あ〜
夕々川や横へするむ路は〜
胡蝶を大金と云ふ意ハ四〜の〜を古木の松陰に
依〜ひて夕々川は流の〜城横の花に〜

して無傳の葉因中念かしの近幸白毎に
 風夕風と暮ふハかこさう〜
 小綱子に柳す〜中海さう
 四糸河系は細流〜夕月秋
 の〜さるる〜川中に
 床は〜ぬぐ〜酒香
 もの〜枝かハ常の結月い〜
 男ハおあそ〜若〜
 老人〜交〜福や船は至
 乃重子見〜
 の〜さ〜に秋のり〜

川風中為精〜夕す〜
 杖父の〜ハ七部大流〜
 曲あ〜身〜に抱いて田家〜
 長城〜
 飯あ〜〜
 一書子かの爺〜
 野あ〜困名〜
 す〜〜
 長〜〜人〜
 湯ハ家の湯を雛形〜
 雪〜〜
 涼〜〜
 形

朗蝶云 依然そのたよまば人 ふた日や俊光はのこも権中納言
資頼はをきりてきり後醍醐天皇
 皇の附の 東寺の門は雨や やせし 雨の やせし 雨の やせし
 たはものもあつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ
 けの あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ
 るを あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ
 す あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ
 や あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ
 た あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ
 と あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ
 や あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ
 ち あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ
 か あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ
 な あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ

夕夜八十二

こまの あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ
 ふ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ
 む あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ

東武より上りてくくに對ん

東路の毛膈より川に 床 涼

野水新宅

す あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ

かの 雛形の 威就 あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ
 へ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ
 目 あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ

野の

涼 あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ あつたりぬ

六月雨に路のほみかくなり
 柳亭云と杜子維の文を名と見たり
 今文の真の部にみたり
 蓮花の葉や夕の月をてやる合羽
 さみの花と狐下をふまふ葉
 柳亭云何れも延室中の吟く
 おくも三河むくはき喜花かき
 松杜云是ハ菴枝よりの吟くはをこい糸をを多く
 作ハ菴枝といひてさき喜といひ杜云とい
 三色花出合たるまをりて喜も三河と興
 たるとふへ
 戸花とちとりふ知る

白方八十二

戸花とちりに衣れ名のれ時を
 柳亭云と杜子の地名なり

なるうさるう亭に招れて

たまふ家名を録

いふことまゝの麻や中々の葉

湖布あつて衣をむすの鳥

木葉亭

秋ちうたあつちのりるや四葉亭

愚考茶湯の発端を永平寺道元禪師入唐

してゆきの茶湯の故実甚多しお試作あり

久しうして後称名寺の僧珠光とおぼしめて

初めりるを東山茂政とす初称名寺の僧

永師に其位せしめて護を乞ふ免たす
銀閣寺の東山に書院同仁齋と号し四矣す
之四矣す其方丈にこれを居て禪定の場
ももよらしき度たすことお讀の上定心と
いなり陳光と号志野道身十四卷の悟武田
紹隆利休子及び永乃吉公三千石を有し又居世
の号を勅はは時茶及大にけりた關大茶師
のりハ七部大後にとす

百五十八

なふや紙すく星を飯時分
魯さしも筆や持りむ 郭公
檣やいつの檣中 乃ほとす

依款の中山
けくらなくとをさうあせて郭公

愚考けくらなくとをさうあせて郭公
古今集まかひう根をさやも尼うけら
なくとをさうあせて郭公の中山
此
齊ふうねるやけくらなくとを甲斐の
の方まよ心なくとをさうあせて郭公
赤の白の急解せ居して日を強り一日
又白の沙汰よおふひる時三男泗川云

草津へ湯治の時やめる事あり郭公のや
うぬ時よとあすうら本の枝よとと森す
るいふれ辨くこと悪老おのらくそれよそ
ぞりくい白急解せり郭公のつら
まけれをよと森して居るといふ事
小必定せりいりよと志くはして救白
心を号しけるう一時よ運害を引く
これを祖龜のさ性志と志くはして
さる白を能く居かすとの金言い
小ありうくく丁おくこよよとせり
とつらと非なり月のよとを二ヶああむ
りや代末の僻言よよとせり

白夜八十五

故遣せよ爰又て新む竹 友
飛洲川や牙を安かぬ出く白
野洲川も東海に横田川の下流なり末は湖
多よ入此川をせき入る事なきとらもの
多し至る白く是を道にわくとりよ
さるく村く此をわくをわくもく
悪考望もくも望もくのいひかけすもく
わくわくもくも望もくもわくもくわくもく
といふる茶葉の謎なり
追加山峰よりおくる
茶や老をわくもくも茶 白山
精選日よ跡ありありやわく 鯉

山下や廣葉の落る雨の音
 ありれさうき書れ葉の暗 蛙 小
 葉陽をわや乞食の如く草の上
 葉はこれけこる日さうや雲の客
 夕立の跡乃白いや三穂の松
 五月もや東寺の沙弥の髪わしく
 愚考東寺の空海も乞を勅す西寺の
 守敏乞を妬みて龍王銭射し返と
 いへとも大昨の行力強くりて忽ち雨ふ
 るされを東寺の僧庇塔く鬘刺る
 夏も忘れて修力をそすたとあく東寺
 の沙弥も西のうけ合せ必し髪もれりと髪ゆ

白夜八十六止

録別

わうのりやまき柳着る藤六徳
 花くもと百阿をせてや百合の花
 色車とやうやおと風車
 葉陽をわや乞食の如く草の上
 何れも古網の吟やう

西書といふ文章を西ノ本と
 書く西字は傳りあつと
 初基菩薩の一生杖を
 担もけあを月ひあを
 うや
 世の人乃んけぬあや新の粟

は白のクリの字凡れ字書より栗との
ありて西よりありし、詳するは何れを
流し申文おしる事候ありし、早ぬ近以
字考止器とりの書より西の木を楷
書やのりと云々又説文曰西栗古文
西栗从西从二鹵徐巡説木至西方戰
栗ス云々

されたる全西の木やる事明くさし
るもよりしと云々候やのさるるを
おろしむり候

